

池波正太郎

鬼平犯科帳

11

文春文庫



文春文庫

鬼平犯科帳(十一)

定価はカバーに
表示してあります

1982年5月25日 第1刷

1989年12月5日 第14刷

著 者 池波正太郎

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-714227-9

文 春 文 庫

鬼 平 犯 科 帳
(十一)

池 波 正 太 郎



文 藝 春 秋

目次

男色一本鯢鮓

7

土蜘蛛の金五郎

51

穴

91

泣き味噌屋

130

密告

174

毒

219

雨隠れの鶴吉

265

解説——市川久夫

309

鬼平犯科帳 (十二)

男色一本饅飴

なんしよくいつぽんうどん

一

きびしい冬の寒さが、身につけているものを一枚一枚ぬぎ捨ててゆくように消えて行く春の訪れよりも、むしろ、

「あつという間に……」

夏が逃げ去り、たちまちに、空が高く澄みわたって来る秋の感触のほうを忠吾は好んだ。火付盗賊改方同心・木村忠吾の市中見廻り担当区域は、本所と深川であった。

「ああ……実に、さわやかな……」

おもわず口にはぼせて、忠吾は胸いっぱい秋の午後の大気を吸いこんだ。

雪ふる日や木枯しの吹き荒ぶ日。または目もくらむ炎天の日の市中見廻りにくらべると、春・

秋の晴れた日の見廻りは、おもわず役目を忘れさせるほどに、

(こころよい……)

のである。

まだ三十前の独身ひとりみなのだが、色白の、ぼってりとやわらかいからだ躰のもちぬしだけに、汗掻きの忠吾は夏が大の苦手にがてだ。

腕力わんりよくのほうは、相撲を取っても密偵・伊三次いさじにかなわぬ木村忠吾だが、剽軽ひようきんな性格をだれにも愛され、芝・神明前の菓子舗「まつむら」で売り出している「うさぎ饅頭まんじゅう」にそっくりだというので、口の悪い与力よりきや同心は、忠吾のことを、

「兎忠うさちゅう」

などと、よんでいる。

この日。

木村忠吾は昼前まで本所界限かいわいを見廻り、それから深川へ入り、密偵・小房の衆八が亭主におさまっている扇橋の船宿「鶴や」へ立ち寄って、昼飯をよばれた。

(どうも、おかしいな……?)

「鶴や」を出て、小名木川沿いの道を万年橋の南詰から左へ曲がったときに、忠吾は、(おれを、だれかが尾つけている……)

と、おもった。

そこは忠吾も、盗賊改方の同心であった。いうにいわれぬ勘かんがはたらき、どうも、すこし前か

ら、うしろを歩いて来る何者かに尾行びこうされているような感じがしたのだ。

忠吾は、曲がり角の小笠原家・下屋敷の土塀どべいに身を寄せ、いま来た道をうかがって見た。通行の人びとは多いが、それらしい者の姿は無かった。

（おれの気の所為せいかな……？）

それから忠吾は、そのことをすっぱりと忘れてしまい、深川の諸方を見廻ったのち、蛤町はまぐりにある名刹めいさつ・永寿山海福寺えいじゅさんかいふくじの門前へさしかかった。

日は傾かたむいていたし、かなり歩きもした。腹も空すいてきたし、こうしたときに海福寺門前へさしかかったので、どうしても忠吾、素通りはできない。

というのも、門前の豊島屋としまという茶店に出している一本鰻鮓いっぽんうなぎが、忠吾の好物なのだ。その名のごとく、五寸四方の蒸籠せいろうふうの入れ物へ親指ほどの太さの一本うどんが、ぐるを巻いて盛られたやつを、柚子ゆずや摺胡麻すりごま、葱などの薬味をあしらった濃目こいめの汁つゆで食べるのである。

すでに顔なじみの木村忠吾が入って行くと、顔見知りの、年増としまの女中が、

「いま、空あいておりますから……」

と、海福寺の前庭が垣根かきごしに見える奥の小座敷へ入れてくれた。

豊島屋では忠吾のことを「一本うどんが大好きな浪人さん」と、見ている。

忠吾が市中見廻りのときの変装は、畏敬いけいする長官おかしら・長谷川平蔵をまねた着ながし姿に浅目の編笠である。

「先まず、酒をたのむ」

と、忠吾は、海福寺の庭からだによってくる菊の香に、うっとりと目を細めた。

そこへ、

「同席させていただいて、よろしい？」

声が、かかった。

野太のどいくせに、妙にやわらかな男の声であつた。

小座敷の向うの、茶店の土間に立ち、こちらへ笑いかけているのは中年の大男さむらいの侍である。総髪がみをきれいにゆいあげ、小ざっぱりとした着物に袴はかま。よい拵こしらえの両刀を腰へたばさみ、一見、しかるべき学者か剣客けんかくのようにおもえた。

濃い眉毛まゆげ、隆たかくふとやかな鼻、厚い唇くち、やさしげな細い眼。そして髭ひげを剃そったばかりの頬からあごにかけて青々あおあおと絵具を刷はいたように見えるのは、よほどに毛深い体質たいくなのであろう。

しかも、たくましい筋骨きんこつ、ひろく厚い胸、堂々たる体軀たいくのこの侍が、

「同席、かまわぬかしら？」

侍とも男ともおもえぬ妙な言葉づかいで、忠吾にはなしかけたものだから、さすがの忠吾うさぎも毒気をぬかれてしまい、また、断わる理由もないので、

「さ、どうぞ」

と、こたえた。

「では、ごめんを」

侍の巨体が、いかにも身軽く小座敷へあがりこんで来て、ついて来た女中へ、

「わしも、酒、いただく」

虫酸^{むしす}が走るような声でいうものだから、年増の女中は笑いを堪^{こら}えて駆け去った。

（どうも、気味^{きみ}のわるい侍だな……）

いかもの食いでは引けをとらぬ木村忠吾も、さすがに顔をそむけ、銚子^{ちようし}へ手をのばしかけたそのとき、件^{くだん}の大男がすいと横合いから銚子を取りあげ、忠吾へ寄りそい、

「お酌^{しやく}いたそう」

忠吾の耳もとへ、なんと、厚切りの刺身を二つならべたような唇を押しつけるようにしてささやくと同時に、大男の左掌^{ひだりて}が、さっさと忠吾の臀部^{でんぶ}を撫^なでさすったものだ。

「う……」

と、忠吾、棒をのんだような顔つきになった。

そして、この夜……。

木村忠吾は役宅へ帰って来なかった。忠吾は役宅内の長屋に暮している。

つぎの夜も、忠吾は帰らぬ。

こうなると、盗賊改方でも打ち捨ててはおけなくなったが、長谷川平蔵は、「今夜だけ待て。どこぞの岡場所の女に、鼻毛を抜かれているのやも知れぬ」そういった。

しかし平蔵は、まじりともせず朝を迎えたらしい。

朝になって忠吾がもどらず、もはや、どう見ても行方不明ゆくえふめいときまったとき、平蔵も、さすがに顔色が変わった。

「出られるものは、みな、本所・深川へまわって、忠吾うさぎの足取りを探れ。おれも出る」と、平蔵は一同にいいわたした。

二

同じ朝を、忠吾は、暗い湿しめっぽい穴蔵の中で迎えた。

ふとい柱によりかかった忠吾の両手と両足が、細引ほそびきで固く縛しばられていた。

忠吾は、この穴蔵で三夜をすごしたことになる。

（何が、どうなっているのだから……？）

さっぱり、わからなかった。

あのととき、つきまとして来る侍に、閉口へいこうし、忠吾は豊島屋の土間に並べてある腰掛けへ移り、そこで名物の一本うどんを食べた。

（おれを、色子いろこに間ちがえやがった……）

いまいましてならぬ。

なぐりつけてやりたかったのだが、巨大な侍の体軀に圧倒された。

うどんを食べながら、ちらちらと小座敷のほうをみやると、侍は依然いぜん、小座敷にあぐらをかき、障子を開け放ったまま、ちびりちびりと酒をのみ、こちらを凝じつと見つめているではないか……。

盃をふくむ厚い唇が濡れ濡れと赤い。

細い両眼が針のよう^{はり}に光って、瞬き^{まばた}もせず、忠吾を凝視^{ぎょうし}しているのだ。うす気味^{きみ}が悪いことおびただしい。

何よりも忠吾は、自分が男色^{なんしよく}の対象にされたことがくやしくもあり、なさけなくもあった。

いっそ、侍の傍^{そば}へ行き、

「おれは、火付盗賊改方の同心を相つとめる木村忠吾というものだ」

名乗りをあげてやろうと考えもしたのだが、

（いや、それも大人気^{おとなげ}ない）

と、おもった。いや、むりにもそうおもうことにしたのだ。本当のところは、やはり、大男の侍^{こわ}が怖^{こわ}かったのである。

忠吾は早々に一本うどんを食べ終るや、ちょっと侍のほうを見て、肩をそびやかし、

「えへん!!」

咳^{せき}払いを一つ、やってのけてから豊島屋を出たのであった。

それから忠吾は、

（もう、ひと廻りしよう）

と、水郷・深川を縦横にめぐり流れる堀川をいくつか渡って、とっぷりと日が暮れたところには、木場^{きば}の一角に立っていた。

（さて、そろそろ御役宅へ帰り、あたたかい飯を腹に入れようか）

忠吾は、ふところから用意の小田原提灯おだわらちようちんを出した。どこかで火を入れるつもりであった。

深川の木場は、江戸の材木商の大半があつまっている場所で、堀川に区切られた材木置場が見わたすかぎりだ。

そのとき忠吾は、島田町の東、二町ほどのところにいた。

彼方に筑後橋ちくごが見え、橋の向うに島田町の町屋まちやの灯りあかがのぞまれる。そこへ行って提灯へ火を入れようと、忠吾は歩き出した。

左側は暗い堀川。右側は材木置場だ。

と……。

立てならべられた材木の蔭から、ひよいと黒い影が二つ三つ飛び出して来たとおもったら、ぐわあんと、忠吾の頭がしびれた。

背後から棍棒こんぼうのようなもので撲りつけられたのであろう。

忠吾は、そのまま気をうしなった。

気がついたとき、すでに穴蔵の中にいた。

(なんで、おれが……?)

私怨しえんをうけるおぼえはなかった。

となると、どうしても、木村忠吾の役目と身分を知っている盗賊たちか、兇徒きようとの仕わざにちがいない。

(おれを、かどわかして、どうするつもりなのか……?)

激しい不安が、忠吾をおびえさせた。

穴蔵の戸が開いたのは、このときである。

件くだんの侍であつた。

侍が持っている手燭の蠟燭の灯りで、穴蔵の中が、ぼんやりと見えた。六、七坪はあろうか。三方に何か荷物のようなものが積み重ねられてあつた。

侍の躰が、うす暗い穴蔵の中で二倍にも三倍にも大きく見えた。

「どうだな？」

侍が、女のようにやさしい声で、

「ゆるして、な」

と、いう。

忠吾は、怒りをこめて、

「なぜ、私を、こんな目に会わせるのだ？」

詰問きつもんした。

「ゆるして、な……」

と、こたえが返って来る。

忠吾は、よほど、自分の役目と身分を明かしてやろうとおもつた。

それを、おもいとどまったのは、まだ、相手の正体をつかんでいなかったからである。

もし、相手が盗賊か兇徒ならば、身分を明かすことによって、忠吾は抹殺まっさつされかねない。